

地域を支える泌尿器科として 3つの新たな治療法を採用

この度、泌尿器科に新部長が着任しました。
導入準備中の新たな治療法についてご紹介します。



あらゆる手術経験を活かし 治療の幅を広げていく

私はこれまで名古屋大学において、主に腹腔鏡の手術とロボット手術、腎移植と前立腺癌に対する小線源治療などに取り組んできました。泌尿器科に来られる患者さんの病気では検査を含めて前立腺癌がもっとも多く、膀胱癌、腎盂尿管癌といった尿路上皮癌や腎癌などがあります。こうした癌に対して有効な手術を患者さんの負担をより少なく実施していくために、これまでの知見を生かして多治見病院で実施できる治療の幅を広げていきたいと考えています。

患者さんの負担を減らす 3つの治療法

当院での治療を充実させるため、現在は新たに3つの治療法を取り入れる準備を行っています。

①手術支援ロボットの導入

術者による経験の差を少なくし、手術をより低侵襲で正確に行えるメリットがあり、2024年の導入に向けて準備を進めています。

②前立腺癌に対する放射線治療（IMRT）におけるスペーサー留置の導入

このスペーサーにより、直腸への放射線障害を軽減し、一回あたりの放射線量を強く照射することが可能になります。そのため、従来であれば2か月弱かかる放射線治療を1か月ほどに短縮することができ、患者さんの負担も軽減できます。こちらは今年度中の導入を目指しています。

③経尿道的膀胱腫瘍切除術における光線力学診断（PDD: Photodynamic Diagnosis）の導入
通常の白色光では発見できない微小な腫瘍が、光線力学診断用剤を服用し、青色光を当てると腫瘍が赤くみえます。膀胱癌は約40%が膀胱内再発するとされていますが、この技術を導入することで、通常では視認できないために切除できなかった腫瘍を切除することができ、再発率の低下が期待できます。

現在当院では前立腺癌の手術を開腹で行っていますが、その場合にもお腹の傷は約7～8センチの小さなものになるようにしたり、適応可能な手術には積極的に腹腔鏡を使用したりするなど、患者さんの負担を軽減す

るための低侵襲手術を心がけています。また今年の手術件数は全身麻酔・下半身麻酔ともに上半期で昨年1年間の手術件数をすでに上回っていて、目標とする「地域で必要な手術が受けられる環境」への着実な進歩を感じています。今後も引き続き、新たな治療法を導入するための取り組みを進めてまいります。

多治見病院の泌尿器科を より充実した診療科へ

今後は東濃地区の泌尿器科を充実させて、地域に暮らす方が遠くの病院まで行かなくても治療が受けられる環境を整えていきたいです。また現在当院の泌尿器科の常勤医師は2名のため、泌尿器科の仲間を増やすこともひとつの目標です。この地域には他の病院や開業医の先生を含めても、泌尿器疾患に対応できる場所というのがとても少ないんです。それに加えてこれまで当院での対応が難しい治療も多く、患者さんに遠い大学病院へ移っていただくケースがよくありました。当院は東濃地域の皆のような病院でもあるため、新たに治療法を導入することで、今まで対応できなかった治療を受けていただけるように成長し、地域全体の医療に泌尿器科として貢献することを目指していきます。

\ 最新 /

TOPICS 多治見病院から、最新のお知らせです

新中央診療棟の整備を進めています



2024 年の開院に向けて

昨年の9月に着工し、来年の12月末までを予定工期として工事を進めています。7月現在では基礎工事を行っており、基礎の上には免震装置を設置します。その後、鉄骨建方を行うと、建物の骨格がようやく見えてきます。



可能性を広げる新しい医療機能

新中央診療棟は手術・診療機能のほか防災機能を拡充させる予定で、特に大きく変わるのは「ハイブリッド手術室」の採用です。ハイブリッド手術室とは、X線による血管造影装置と、清潔度の高い手術室を組み合わせたもの。その場の画像検査だけでなく、手術以前に行った画像検査も利用できるため、解像度の高い画像を見ながらのカテーテル治療や精度の高い手術が可能となります。

そのほか、外来の診察室を現在のパーテー

当院は岐阜県東濃・可茂地域における基幹病院として救急医療、災害医療、周産期医療及び医療連携等の拠点機能を担い、主に高度急性期・急性期を対象とする医療を提供してまいりました。現在の中央診療棟及び東病棟救急関連部門の老朽化に伴い、医療・施設機能の強化を図るため新中央診療棟の整備を進めています。

ション仕切りから個室へと変更するなど、プライバシー配慮の向上も図ります。また、デザイン面では、地元産のタイルや県産集成材を使用し、SDGsに貢献します。

今までの手術・診療機能を一段階レベルアップさせることで、できなかったことをできるように、見えなかったものを見えるようにすることが目的のひとつです。当院は、東濃・可茂地域において医療・施設機能が最も充実した病院を目標とし、地域内での医療完結を目指します。

工事に際しましては、安全の確保に十分な対策を立てて進めてまいります。工事期間中は何かとご不便・ご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



エントランス

エントランスホールには、県産集成材と地元産タイルを使用



受付

総合受付は、美濃和紙を用いた照明器具で明るい雰囲気



地方独立行政法人

岐阜県立多治見病院

〒507-8522 岐阜県多治見市前畑町5丁目161番地
TEL:0572-22-5311 FAX:0572-25-1246



公式ホームページ

<https://www.tajimi-hospital.jp/>

岐阜県立多治見病院 vol.45 2022年8月

ご自由にお持ちください

けんびょういん

基本理念 安全で、やさしく、あたたかい医療に努めます

整形外科

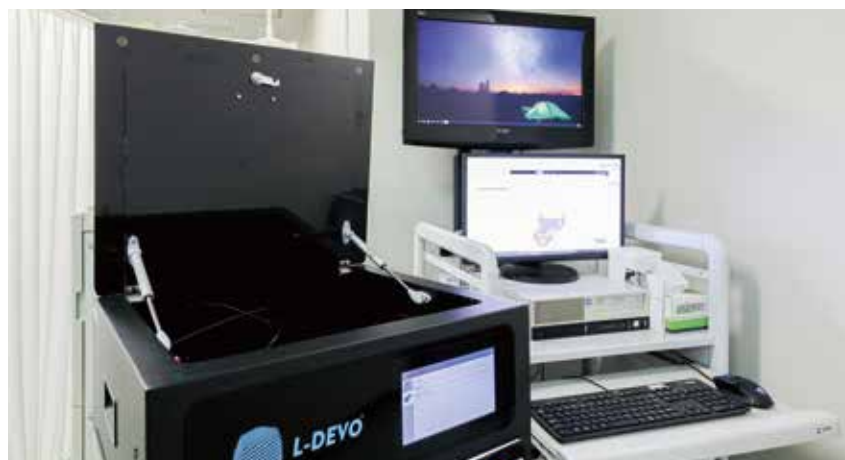
患者さんの社会復帰を 地域連携で支えたい



顎骨形成術・顎骨腫瘍摘出術における 3Dプリンターの活用

歯科口腔外科で導入している3Dプリンターを
活用した治療・手術についてご紹介します。

歯科口腔外科
主任医師
丹羽 裕明
岐阜県立多治見病院



3Dプリンター「L-DEVO®」

模型を使った確認で 手術の安全性を高める

歯科口腔外科では、口腔癌、顎変形症、歯性感染症、粘膜疾患、埋伏智歯など顎口腔領域のさまざまな疾患に対して治療・手術を行っています。その中でも、顎骨形成術と顎骨腫瘍切除において活用できる3Dプリンターを導入しました。顎骨形成術とは顎変形症の手術のことで、顎骨腫瘍摘出術は顎の骨の中にできる腫瘍の手術のこと。手術では顎の骨を切るのですが、CTだと正面や横からの平面での確認になります。3Dプリンターを導入したことで模型を作れるようになり、立体的な確認ができることで、安全で確実な切除範囲の決定が可能に。器具を入れる角度などの精度を上げることができるようになりました。骨の中の神経に近い部分を手術する場合

もあるため、事前に模型で神経の位置関係を確認することでより損傷を少なくすることができ、合併症を避ける手術の安全性を高めることにもつながります。



顎の骨の模型

緊急性のある 手術にも対応

今までは、模型が必要な場合は外注の業者さんにデータを渡

して模型を作ってもらっていたので、できあがりまでに1〜2週間かかっていました。今では院内で模型を作れるため、10時間ほどで完成させることができ、緊急性のある手術で模型が必要だというときに重宝しています。患者さんに手術の説明をする際にも活用できますし、手術を担当する医師にしてみても、特にイレギュラーな手術などにおいては顎の模型を縦割りにしてリアルに確認することで病態を理解しやすいと思います。事前に手術の準備ができるので、手術の時間短縮につながることもあります。

さまざまな症例への 活用を目指す

現在は顎骨形成術と顎骨腫瘍摘出術の2つの手術において活用していますが、今後はもっといろんな症例に活用できないか検討しているところです。3Dプリンターは目的ではなく手段であり、道具なので、科の中でアイデアを出し合いながらそれを実現していきたいと考えています。多治見病院は地域の拠点病院であり、歯科口腔外科でも、口腔癌、顎変形症、歯性感染症、粘膜疾患から親知らずまで、さまざまな症例に対応しています。地域の皆さまに頼っていただけるような場所として、これからもいろいろと精進してまいります。

膝の手術をより安全に、正確に 手術支援ロボ「ROSA」を導入

人工膝関節置換術のための手術支援ロボの導入と、
あらゆる症状に対応する当院の整形外科をご紹介します。

整形外科
副院長兼整形外科部長
高津 哲郎
岐阜県立多治見病院



手術支援ロボ「ROSA」

手術支援ロボを導入し、 治療をより安全に

整形外科では主に交通事故や転倒などの外傷に対する治療と、ご高齢の方に多い膝や腰の痛み、しびれを緩和するための治療を行っています。今回導入した手術支援ロボ「ROSA」は、後者の加齢により生じる膝の痛みを軽減する手術をサポートしてくれる機械です。手術では関節を開き、骨の傷んだ部分を削って人工関節を装着しますが、これまではその装着角度をはじめとしたさまざまな点が術者の経験に委ねられていました。ロボットの使用により、骨を削る角度や人工関節の装着などを正しい位置へと数値で導くことができ、低侵襲で合併症リスクが少なくより安全な手術が可能になります。また術中のデータが画面上に数値で表されるため、教育面の理解促進

に力を発揮することも特徴です。膝の痛みに対する治療は内服や関節内注射などの保存的な治療がスタートですが、手術を検討されている患者さんはお気軽にご相談ください。

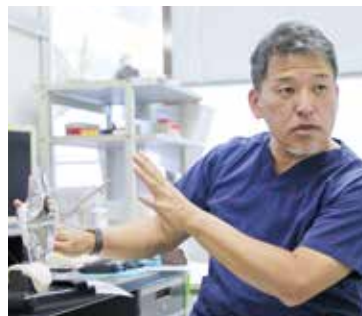
若手医師が伸びやかに 学べる環境づくりを

ロボット導入もその一環ですが、若手スタッフに初期的〜専門的な技術・知識を得られる場所を提供し、成長を支えることも私の役目だと考えています。現在整形外科には8名の医師が在籍しており、その半分は若手スタッフです。一緒に手術に入って知識を伝えていくことはもちろん、カンファレンスという話し合いの場を多く設けることで、整形外科医にとって大切なレントゲンなどの画像診断についてや若い先生が受け持つ患者さんについての相談

を受ける機会を作っています。わからないことや学びたいことを気軽に聞ける環境づくりをこれからも進めていきたいです。

地域医療を担う 三次救急病院として

三次救急病院である当院は、命に関わるような重い外傷を負った患者さんも積極的に受け入れています。患者さんの社会復帰をサポートするための仕組みとして、地域のリハビリ病院や開業医の先生と「地域連携パス」というチームをつくり、急性期治療・リハビリを経て回復期病院への転院、そしてかかりつけ医に戻るまでの対応を年間150〜200件ほど行っています。また当院には手の外科を専門とする先生や、骨軟部腫瘍を専門とする先生が在籍しており、整形分野での幅広い診察が可能です。患者さんが暮らす地域の中で安心して治療を受けていただけるよう、今後もチーム一丸となって治療に取り組んでまいります。



研修医の / NEW FACE!



1年目 研修医 野本 峻二郎

Q.多治見病院を選んだ 理由は何ですか？

A.大塩:多治見出身ということもあり、地元で医師として働きたいと思い選びました。多治見病院には志望している整形外科があり、科の先生の人数も多く、いろんな症例を経験できるのがいいなと思います。
A.野本:私は大学時代から岐阜に住み始め、環境の良さなどを実感して岐阜で働きたいと思うようになりました。救急外来をはじめ多くの科が充実している多治見病院で経験を積めたらと思ったことが選んだきっかけです。

Q.1日の流れや 研修医の業務について 教えてください

A.大塩:8:30から始業し、17:15まで勤務します。1年目、2年目でさまざまな科を回りながら、担当患者さんの回診やカルテ記載をはじめ、検査や治療、カンファレンスへの参加まで行います。
A.野本:週に2回、始業前に2年目研修医が主催する勉強会に参加しています。経験した症例や手術などについて、テーマを決めて講義してくださるのでとて

多治見病院の研修医

当院では毎年研修医を受け入れており、
研修医は基本的診療能力を習得するために
日々研修に励んでいます。
今回は、研修医1年目2名による声をご紹介します。



1年目 研修医 大塩 展甲



も勉強になります。

Q.研修医として心がけて いることはありますか？

A.大塩:それぞれの科でしか経験できない手技を積極的にやらせてもらい、先生や看護師さんにフィードバックをいただいて上達できるように努めています。また、救急外来では研修医が患者さんの入院・帰宅などの治療方針を判断することも多いので、判断力を高められるよう先生方のやり方を見ながら日々学んでいます。
A.野本:研修医同士で症例や業務についての情報を共有し、みんなで一緒にレベルアップしよう!と意識することを心がけています。そのほかには、今担当

している科に集中することです。その科でしか学べないことがたくさんあるので、毎日いろんなことを吸収するようにしています。

Q.今後の目標を 教えてください

A.大塩:最初の2年では幅広い疾患に初期対応できる能力を身につけ、3年目以降は志望する整形外科で専門的に学んでいきたいです。
A.野本:基本的な手技をしっかり習得し、現場で通用するような知識をつけるのが目標です。そのためにも、こういう患者さんにはこう対応する、といった自分の中でのパターンのストックもしていきたいです。